

三重県埋蔵文化財調査報告208-1

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ

外山遺跡・片落C遺跡

2000.3

三重県埋蔵文化財センター

序

県下有数の大河である宮川の流域には、古くは旧石器時代から連綿とした人間の営みがありました。それらは、土に埋もれた遺跡として今に残り、大地に刻まれた地域固有の歴史遺産としてかけがえのないものであることは言うまでもありません。さらに、これら埋蔵文化財は地中に埋もれており、平素、我々が直接目にすることはできません。それゆえに、一般文化財とは異なる慎重な調査と保護の必要性があると言えましょう。

一方、宮川を水源とする宮川用水は、古来農地が高位にあるため、宮川を間に控えながら、その水を灌漑用水として十分に利用できず、天水や溜め池などに頼っていた地域を潤してきましたが、完成から30年の年月が経過し、農業を取り巻く環境の変化による用水不足や、施設の老朽化により、地域の営農活動に深刻な影響がでてきております。これを受け、宮川用水第二期土地改良事業が行われることになりました。

宮川用水第二期土地改良事業地内には、多数の埋蔵文化財が遺存していることが確認されています。これらは一度破壊されてしまうと二度と復元できません。しかし、その一方で用水路の改修も急務となっており、三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と用水路の改修との調和を図るために、農林水産省等関係機関と協議を重ねてきました。その結果、工法や設計の変更等により極力遺跡の保存を行い、やむを得ず工事によって保存できないものについては、当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、記録保存することになりました。

今回報告するのは、多気郡明和町に所在する外山遺跡及び片落C遺跡の発掘調査記録であります。本書が、消滅した遺跡にかわって、郷土の歴史・文化を未来に伝える一助となれば幸いです。

なお、末筆ながら、発掘調査事業の推進にあたり、ひとかたならぬご理解とご協力をいただいた農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所並びに、社団法人中部建設協会、明和町教育委員会をはじめとする関係機関各位及び、地元の方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井興生

例　　言

1. 本書は、三重県教育委員会が農林水産省東海農政局から委託を受けて実施した、国営宮川用水二期土地改良事業地内に所在する埋蔵文化財発掘調査事業のうち、平成10年度に現地調査を行い、平成11年度に整理・報告書作成業務を実施した、外山遺跡及び片落C遺跡の発掘調査報告書である。さらに付編として、平成9年度に実施した工事立会いの結果、現状保存された長五郎林B遺跡の調査結果概要と、平成10年度に実施した合戦田古墳群の調査結果も併せて掲載した。
2. 現地調査及び整理・報告書作成にかかる費用は、農林水産省東海農政局の全額負担による。
3. 本書に使用した事業計画図及び地形図は、農林水産省東海農政局宮川用水二期土地改良事業所の提供による。その他建設省国土地理院発行の地形図を使用した。
4. 本書に掲載した写真の撮影、遺構・遺物図面の作成は、調査・報告担当者のほか、調査補助員・業務補助員が行った。
5. 図面における方位は真北を用いた。なお、真北は、磁針方位の西偏約6° 20'である。(国土地理院「明野」「松阪」1:25,000(平成4年6月1日発行)から)
6. 本書で報告した各遺跡の記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
7. 本書では、土層及び遺物の色調について小山・竹原編『新版標準土色帖』(9版 1989)を使用した。
8. 本書で使用した遺構表示略記号は下記による。
SK：土坑 SD：溝 SR：旧流水路 SZ：不明遺構
9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目 次

I. 前 言.....	(筒井正明)	1
II. 位置と環境.....	(小山憲一)	4
III. 外山遺跡.....	(小山憲一)	6
1. 遺構.....	6
2. 遺物.....	12
3. 結語.....	14
IV. 片落C遺跡.....	(小山憲一)	15
1. 遺構.....	15
2. 遺物.....	18
3. 結語.....	19
V. 付 編.....	(小山憲一)	20
1. 長五郎林B遺跡.....	20
2. 合戰田古墳群.....	22

挿図目次

I. 前 言.....	第10図 土師器焼成坑検出状況図.....	16
第1図 事業関連遺跡位置図.....	第11図 遺構平面図.....	17
II. 位置と環境.....	第12図 土層断面図.....	17
第2図 遺跡位置図.....	第13図 出土遺物実測図.....	18
III. 外山遺跡.....	V. 付 編.....	
第3図 遺跡地形図.....	第14図 遺跡位置図.....	20
第4図 遺構平面図.....	第15図 遺跡地形図.....	20
第5図 調査区位置図.....	第16図 出土遺物実測図.....	21
第6図 土層断面図.....	第17図 トレンチ配置図.....	21
第7図 出土遺物実測図.....	第18図 調査区周辺古墳分布図.....	22
IV. 片落C遺跡.....	第19図 調査区位置図.....	23
第8図 遺跡地形図.....	第20図 土層断面図.....	23
第9図 調査区位置図.....	第21図 出土遺物実測図.....	23

表 目 次

I. 前 言.....	
第1表 事業関連遺跡一覧表.....	2
第2表 平成10・11年度調査体制.....	3
第3表 平成10・11年度調査遺跡一覧表.....	3
III. 外山遺跡.....	
第4表 出土遺物観察表.....	13
IV. 片落C遺跡.....	
第5表 出土遺物観察表.....	18
V. 付 編.....	
第6表 検出遺構・出土遺物一覧表.....	21

写 真 目 次

外山遺跡.....	
調査前風景.....	24
作業風景.....	24
北西調査区全景.....	25
SD3・SD4.....	25
SD1・SD2.....	26
SD5・SD6・SD7.....	26
SD1集石.....	27
SD1遺物出土状況.....	27
出土遺物.....	28
片落C遺跡.....	
土師器焼成坑検出状況.....	29
調査区全景.....	30
合戦田古墳群 溝状遺構断面.....	30

I. 前 言

調査にいたる経過

三重県伊勢市、多気郡多気町・明和町・大台町、度会郡玉城町・二見町・小俣町・御薗村の、1市6町1村にまたがる農業地帯に農業用水を供給する宮川用水は、昭和32年～41年にかけて実施された国営宮川用水事業（以下前回事業と表記）によって整備された。

しかし、事業完了後30年以上が経過し、その間、農業への大型機械導入の一般化と現行水利権との関係による最大取水量不足、用水路の老朽化に伴う漏水事故の多発やそのための維持管理費の増大等、重大な問題が発生することとなった。これらの問題を解決するため、用水計画を見直し、用水の確保と前回事業で施工した施設の改修を行う目的で、平成8年3月に計画確定した国営宮川用水第二期土地改良事業（以下今回事業と表記）によって、導水路トンネル（L = 16.6km）の新設、斎宮調整池（V = 250万m³）の築造、幹線用水路（1号幹線水路 L = 13.5km、2号幹線水路 L = 6.5km、明野支線水路 L = 0.4km）の改修整備を実施することとなった。

今回事業における導水路と幹線用水路は、その性格上広範囲の地域にまたがる工事計画となっている。この工事計画予定地は、国史跡斎宮跡と伊勢神宮に挟まれ、長く伊勢国の政治・経済・信仰の中心地の一角であったと考えられる地域が主である。このため、斎宮制度が最盛期の頃は勿論、旧石器時代～近世に至るまでの埋蔵文化財包蔵地が濃密度に分布する地域である。また斎宮調整池築造予定地およびその周囲の丘陵には、斎宮池古墳群をはじめとする多数の古墳が分布する。

こうしたなかで、工事計画内の埋蔵文化財保護と円滑な今回事業実施のために、三重県埋蔵文化財センターと宮川用水第二期農業水利事業所の間で調整・協議がもたれることとなった。

埋蔵文化財保護協議

今回事業に関する埋蔵文化財保護の調整・協議については、平成9年度から本格化し、宮川用水第二期農業水利事業所からの公共事業実施回答（平成9

年7月28日付け 9宮二水第293号）および、事業地内の埋蔵文化財包蔵地の分布調査依頼（平成9年7月28日付け 9宮二水第294号）の手続きがなされた。これを受けた三重県埋蔵文化財センターは調査第二課第二係で、急きよ平成9年度工事施工部分についての分布調査を実施し、その結果（平成9年9月5日付け 教研第451号）をもとに、該当する遺跡について宮川用水第二期農業水利事業所と調整・協議を重ねた。その上で、1号幹線水路工事施工部分について、長五郎林遺跡を中心とする範囲を対象とした工事立ち会い調査を実施した結果、土師器焼成坑等の遺構が良好な状況で検出されるとともに、長五郎林遺跡自体の範囲が広がることも確認した。^①

今回事業での幹線用水路部分の工事は、主に現用水路施設を除去し、その範囲を中心にバイブルайнを設置する計画であるため、今回事業の工事予定範囲と前回事業での推定される工事施工範囲が重なる部分が多く、現在は埋蔵文化財包蔵地として確認されている範囲内にあっても、前回事業の工事施工時に、遺構部分が既に破壊されている可能性も考えられた。これは、埋蔵文化財包蔵地確認作業が本格化する以前の時期であったために、その保護協議等が実施されることなく、前回事業の工事が施工されたからである。しかし、前記の長五郎林遺跡の工事立ち会い調査結果からは、少なくとも今回工事予定範囲内には遺構が遺存する部分があるとともに、場合によっては前回事業の工事施工範囲内にも、その可能性があることが判明した。^②

一方、今回事業が本格化する平成10年度以降にむけての具体的な調査対応のために、宮川用水第二期農業水利事業所から、平成10年度以降の各種公共事業工事についての回答（平成9年9月26日付け 9宮二水第352号）を受け、三重県埋蔵文化財センターは、今回事業予定地全体の分布調査を実施した。この結果、その時点では、斎宮調整池関連で20遺跡、導水路部分2遺跡、1号幹線水路部分43遺跡、2号幹線水路部分6遺跡の計71遺跡を協議対象として、宮川用水第二期農業水利事業所へ提示（平

成10年1月23日付け 教理第600号) し、これをもとに、両者で具体的な調整・協議を進めた上で、平成10年度より発掘調査体制を発足させることで合意した。

調査の体制

今回事業にともなう発掘調査は、宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査として、平成10年4月1日に、それぞれ三重県知事名、農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所長名にて、三重県と農林水産省の二者間で調査にかかる協定書を締結するとともに、年度毎に三重県と農林水産省との調査委託契約を締結することとした。調査主体は三重県教育委員会、調査担当を三重県埋蔵文化財センターとして調査第二課第二係が対応することとなった。

また現地調査については、三重県が建設省事業関連(亀山バイパス、中勢バイパス、松阪多気バイパス、東海環状自動車道等)の調査において実施してきた第三者体制を導入することで合意した。これは前記協定の二者に加えて、社団法人中部建設協会理事

長名にて、三重県、農林水産省、中部建設協会の三者間で別途調査作業にかかる協定書を平成10年4月1日に締結し、農林水産省と中部建設協会とで、やはり年度毎に調査作業委託契約を締結することで、現地調査作業業務(作業員、重機類の手配・労務管理・安全管理等の土工部門)を中部建設協会が担当するものである。

こうして平成10年度より本格的に調査が開始され、また平成11年度には度会郡玉城町岡村に、調査第二課第二係玉城整理所を開設した。

平成10・11年度の調査は範囲確認調査を中心であるものの、現在使用されている施設によって、調査実施時期・調査箇所等の規制が多い他、工事の設計・実施期間等の未確定や変更が多いため、調査計画もその状況への対応が迫られ、現地調査は極めて困難な条件のもと実施されている。

(註)

① 本報告書「Y. 手帳 1. 長部林立遺跡」参照

② ちなみに、平成11年度には既にY遺跡の調査において、見用木器の構造物除去後に遺構が確認されたばかり、後用木器分の面においては遺構が保存するかどうかが争った。

③ 山田屋「山田遺跡・北郷古墳群」三重県埋蔵文化財センター(1994)

No.	遺跡名	所在町村	種類	性別	工事種別	No.	遺跡名	所在町村	種類	性別	工事種別
1	笠木原遺跡	多気町大字 多気	古墳	男	工事無	46	新八幡山遺跡(復跡)	明和町有堀中	古墳	男	1号幹線水路
2	今谷原古墳跡	多気町大字 多気	古墳	男	工事無	47	新八幡山遺跡	明和町有堀中	古墳	男	1号幹線水路
3	等高丘2号墳	明和町池村	古墳	男	古跡調査	48	外山遺跡	明和町池村	古墳	男	1号幹線水路
4	等高丘3号墳	明和町池村	古墳	男	古跡調査	49	御井大塚遺跡	明和町池村	古墳	男	1号幹線水路
5	等高丘4号墳	明和町池村	古墳	男	古跡調査	50	御井山遺跡	明和町池村	古墳	男	1号幹線水路
6	真ノ吉古墳	明和町池村	古墳	男	古跡調査	51	御井山遺跡(復跡)	明和町明星	古墳	男	1号幹線水路
7	古墳群隠岐No.1(復跡)	明和町池村	古墳	男	古跡調査	52	御井山遺跡	明和町明星	古墳	男	1号幹線水路
8	古墳群隠岐No.2(復跡)	明和町池村	古墳	男	古跡調査	53	大久山北麓A遺跡(復跡)	明和町明星	古墳	男	1号幹線水路
9	古墳群隠岐No.3(復跡)	明和町池村	古墳	男	古跡調査	54	大久山北麓B遺跡(復跡)	明和町明星	古墳	男	1号幹線水路
10	古墳群隠岐No.4(復跡)	明和町池村	古墳	男	古跡調査	55	御井山遺跡	明和町明星	古墳	男	1号幹線水路
11	古墳群隠岐No.5(復跡)	明和町池村	古墳	男	古跡調査	56	大久山北麓C遺跡(復跡)	明和町明星	古墳	男	1号幹線水路
12	古墳群隠岐No.6(復跡)	明和町池村	古墳	男	古跡調査	57	大久山北麓D遺跡(復跡)	小俣町新村	古墳	男	1号幹線水路
13	古墳群隠岐No.7(復跡)	玉城町玉川	古墳	男	古跡調査	58	玉城町玉川遺跡	玉城町新村	古墳	男	1号幹線水路
14	古墳群隠岐No.8(復跡)	玉城町玉川	古墳	男	古跡調査	59	御井山遺跡	玉城町新村	古墳	男	1号幹線水路
15	古墳群隠岐No.9(復跡)	明和町池村	古墳	男	古跡調査	60	大日遺跡	明和町明星	古墳	男	1号幹線水路
16	古墳群隠岐No.10(復跡)	明和町池村	古墳	男	古跡調査	61	ツバヤ山遺跡	明和町下小側	古墳	男	1号幹線水路
17	古墳群隠岐No.11(復跡)	明和町池村	古墳	男	古跡調査	62	如意山遺跡	明和町明星	古墳	男	1号幹線水路
18	唐宮古墳	明和町池村	古墳	男	古跡調査	63	御井山遺跡	伊勢市御井町	古墳	男	1号幹線水路
19	大掛山遺跡	明和町池村	古墳	男	古跡調査	64	二ノ森遺跡(復跡)	御井町南向	古墳	男	1号幹線水路
20	大掛山遺跡	明和町池村	古墳	男	古跡調査	65	御井山遺跡	御井町南向	古墳	男	1号幹線水路
21	大掛山遺跡	明和町池村	古墳	男	古跡調査	66	御井山遺跡	御井町南向	古墳	男	1号幹線水路
22	唐宮古墳	明和町池村	古墳	男	古跡調査	67	御井山遺跡(復跡)	御井町南向	古墳	男	1号幹線水路
23	伊勢ガントリークラブ	明和町池村	遺跡	男	古跡調査	68	御井山遺跡	御井町南向	古墳	男	1号幹線水路
24	戸畠原遺跡	明和町池村	遺跡	男	古跡調査	69	御井山遺跡	御井町南向	古墳	男	1号幹線水路
25	戸畠原遺跡	明和町池村	遺跡	男	古跡調査	70	御井山遺跡	御井町南向	古墳	男	1号幹線水路
26	大掛山遺跡(復跡)	明和町池村	遺跡	男	古跡調査	71	御井山遺跡	御井町南向	古墳	男	1号幹線水路
27	大掛山遺跡	明和町池村	遺跡	男	古跡調査	72	御井山遺跡	御井町南向	古墳	男	1号幹線水路
28	大掛山遺跡	明和町池村	遺跡	男	古跡調査	73	御井山遺跡	御井町南向	古墳	男	2号幹線水路
29	合鍵石6号墳	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	74	御井山遺跡(復跡)	御井町宮古	古墳	男	2号幹線水路
30	合鍵石5号墳	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	75	御井山遺跡(復跡)	御井町宮古	古墳	男	2号幹線水路
31	合鍵石8号墳	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	76	御井山遺跡	御井町宮古	古墳	男	2号幹線水路
32	片落山遺跡	明和町池村	遺跡	男	古跡調査	77	御井山遺跡	御井町宮古	古墳	男	2号幹線水路
33	荒玉原林1号墳	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	78	御井山遺跡	御井町宮古	古墳	男	2号幹線水路
34	荒玉原林2号墳	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	79	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
35	荒玉原林A遺跡	明和町有堀中	遺跡	男	古跡調査	80	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
36	荒玉原林B遺跡	明和町有堀中	遺跡	男	古跡調査	81	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
37	荒玉原林C遺跡	明和町有堀中	遺跡	男	古跡調査	82	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
38	御井山遺跡	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	83	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
39	御井山遺跡	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	84	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
40	御井山遺跡	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	85	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
41	御井山遺跡	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	86	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
42	御井山1号墳	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	87	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
43	御井山2号墳	明和町有堀中	古墳	男	古跡調査	88	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
44	御井山遺跡	明和町有堀中	遺跡	男	古跡調査	89	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路
45	荒玉原林	明和町有堀中	遺跡	男	古跡調査	90	御井山遺跡	御井町有堀中	古墳	男	2号幹線水路

第1表 事業関連遺跡一覧表

三重県埋蔵文化財センター		調査第二課 第二係					
所長	次長	主幹兼課長	係長	士事	臨時技術補助職員	業務補助職員	
大井 興生	三井 利男 山澤 義貞	吉木 康夫	飼井 正明	小瀬 孝 小山 恵一	瀬野 宏知世 (平成11年度)	北川 泰子、山路 雅子 齋田 洋子、脇置 美美(平成10年度) 瀬野 宏知世(平成10年度)	

第2表 平成10・11年度調査体制

No.	遺跡名	調査面積		調査期間	No.	遺跡名	調査面積		調査期間
		範囲確認調査	本調査				範囲確認調査	本調査	
1	分野水路				2	分野水路			
25	戸塚B遺跡跡地	22m ²	H10. 8. 3 ~ 8. 28	72	城塙A遺跡跡地	160m ²	H10. 7. 13 ~ 7. 30		
26	大林A遺跡	56m ²	H10. 8. 3 ~ 8. 28	75	東浜塙山遺跡(仮称)	66m ²	H10. 10. 2 ~ 10. 5		
32	片瀬C遺跡	32m ²	H10. 8. 3 ~ 8. 28	76	鶴塙C古墳(假称)	17m ²	H10. 10. 6 ~ 10. 9		
		120m ²	H10. 11. 24 ~ 12. 9	71	丁之垣内遺跡	48m ²	H11. 2. 2 ~ 2. 16		
43	道場遺跡跡地	40m ²	H10. 8. 3 ~ 8. 28	70	丁之垣内遺跡跡地	16m ²	H11. 2. 2 ~ 2. 16		
27	大林A遺跡跡地	96m ²	H10. 5. 7 ~ 6. 10	74	駿蛇塙跡(假称)	26m ²	H11. 2. 2 ~ 2. 16		
37	駿シB遺跡跡地	40m ²	H10. 6. 25 ~ 6. 30		遺跡跡地				
48	外山遺跡	700m ²	H10. 11. 6 ~ H11. 1. 18	15	古墳状跡地No.5	23m ²	H11. 9. 21 ~ 9. 28		
73	駿シA遺跡南端跡地	33m ²	H11. 2. 22 ~ 3. 4	16	古墳状跡地No.6	25m ²	H11. 9. 29 ~ 10. 1		
27	合浦田古墳群		H10. 11. 24 ~ 12. 9	17	古墳状跡地No.7	3m ²	H11. 10. 20 ~ 10. 28		
24	戸塚B遺跡	60m ²	H11. 7. 15 ~ 7. 26	18	古墳状跡地No.8	42m ²	H11. 10. 29 ~ 10. 28		
45	駿シB遺跡	13m ²	H11. 8. 30 ~ 8. 31	19	古墳状跡地No.9	26m ²	H11. 9. 7 ~ 9. 13		
		24m ²	H11. 11. 22	22	蕭苦池遺跡	120m ²	H11. 11. 25 ~ 12. 7		
		300m ²	H11. 11. 26 ~ 12. 29			290m ²	H12. 3. 6 ~ 3. 10		
49	裏竹大塚遺跡	29m ²	H11. 8. 19 ~ 8. 20	14	幸苦池16号墳	15m ²	H11. 11. 16 ~ 11. 19		
		15m ²	H11. 12. 24			800m ²	H12. 1. 14 ~ 2. 22		
60	糸子山遺跡南側跡地	9. 1m ²	H11. 12. 21 ~ 12. 22	78	古墳状跡地No.12	21m ²	H11. 12. 13		
51	糸子山遺跡	37. 5m ²	H11. 12. 20 ~ 12. 24	79	古墳状跡地No.13	19m ²	H11. 12. 10		
62	糸子山遺跡北側跡地	27m ²	H11. 8. 12 ~ 8. 25	80	古墳状跡地No.14	20m ²	H11. 12. 10		
63	大仏山北麓A遺跡	23m ²	H11. 8. 9 ~ 8. 12	81	古墳状跡地No.15	30m ²	H11. 12. 13		
	(假称)			82	古墳状跡地No.16	46m ²	H11. 12. 13		
64	大仏山北麓B遺跡	61m ²	H11. 8. 2 ~ 8. 9	83	古墳状跡地No.17	18m ²	H11. 12. 17		
	(假称)			84	古墳状跡地No.18	12m ²	H11. 12. 20		

第3表 平成10・11年度調査遺跡一覧表



第1図 事業関連遺跡位置図 (1 : 100,000)

II. 位置と環境

位 置

外山遺跡（1）、片落C遺跡（2）は、いずれも多気郡明和町に所在する。明和町は、宮川と櫛田川に挟まれた洪積台地の西端に位置し、東部には明野台地が、北部・西部には櫛田川及び、かつては櫛田川の本流であったと考えられている支流の萩川の沖積作用によって形成された沖積平野が広がる。また、南部には明和町、同郡多気町、度会郡玉城町の三町にまたがる標高30～100m程の玉城丘陵が連なる。

外山遺跡（1）は、行政上明和町養村に所属し、明野台地と呼ばれる洪積台地上に立地する。一方、片落C遺跡（2）は、玉城丘陵の北端にあたる丘陵上に立地し、行政上は明和町池村に位置する。

環 境

遺跡が所在する明和町養村、池村は、かつて「有爾郷」と呼ばれた地域である。この郷名は、『和名類聚抄』に「有式」とあるほか、延暦23(804)年成立とされる『止由氣宮儀式帳』にも「多氣郡宇武郷」とあることから、平安時代初頭頃には既に「有爾郷」は存在していたと考えられる。「有爾郷」の郷域については明確ではないが、現多気郡明和町から多気町、度会郡玉城町の三町にまたがる広い範囲を有していたとみられる。遺称地として現在も地名にその名残を残す明和町の有爾中は、郷域の中央に位置したためそのように呼称されたという。有爾中を中心として、北には同町上野・下有爾（現明星）が、東には同町養村が、南には現度会郡玉城町の世古・門前・坂本・谷（現日向）・別所（現玉川、下玉川）・吉祥寺（現玉川、上玉川）・井倉が、西には現明和町の池村・岩内・現多気町河田・東池上・西池上・土羽から、南西の田中・野中にまでそれぞれ広がるといわれる。さらに、現明和町の大淀・山大淀・大堀川新田に有爾町野の小字があることから、この地域も「有爾郷」に属した可能性があるといふ。

さて、この地域の特筆すべきこととして挙げられるのが、伊勢神宮への調進を目的とした土器の生産である。前述のように、広範囲に及ぶと考えられる「有爾郷」の全域にわたって土器生産が行われてい

たか否かは不明だが、『玉城町史』では伊勢神宮の鎮座以来、神事に用いられる各種の土器は「有爾郷」十か村から調進されたとしている。十か村とは、前述の現玉城町に所在する七か村と現明和町有爾中・下有爾（現明星）・養村の三か村である。文献史料による伊勢神宮への土器調進の初見は延暦23(804)年成立の『皇太神宮儀式帳』である。ここでは「土師器作物忌」や「陶器作内人」の存在や、土器の調進数・器種数が記されているが、このような土器の生産体制がいつ頃から始まったのかを示す資料ではなく不明である。しかしながら、近年「有爾郷」周辺では、土師器焼成坑を伴う大規模な土師器生産遺跡が多数確認されてきたことから、前述の謎を解く重要な資料と考えられている。昭和52年国史跡に指定された水池土器製作遺跡（3）をはじめ、粘土溜の土坑とともに225基もの土師器焼成坑が検出された北野遺跡（4）や、100基を検出した戸峯遺跡（5）などが代表的なものとして挙げられる。県内ではこの地域以外でも確認されてはいるが、いずれも少数かつ散在的であり、「有爾郷」周辺が県内で確認された遺跡数、検出数ともにその大部分を占める。この特異な状況から、大量に生産された土師器の供給先として最も有力視されているのが斎宮（6）及び伊勢神宮である。また、「有爾郷」周辺で製作された6世紀後半～7世紀前半の甕や長胴甕と酷似するものが尾張や美濃などで多数出土している事例から、「有爾郷」産の土器が伊勢神宮のみならず、交易によって尾張や美濃などの遠隔地にまで運ばれていた可能性も指摘されている。さらに、当地における土師器の大量生産は、当初から尾張や美濃などでの消費をも視野において成立し、「有爾郷」所在の多気郡が7世紀にはすでに伊勢神宮の神郡となっていたことから、これらの動向に伊勢神宮が深く関与しているのではないかという指摘もなされている。

古代において、伊勢神宮の強い影響下で発展を遂げたとみられる「有爾郷」は、中世においても伊勢神宮への土器調進を継続して行っていたことは、小林氏によって検証されている。しかし、中世には伊

勢神宮や伊勢国司北畠氏という領主権力との関係を保ちながらも、従前の隸属的な立場から脱却し、商品土器の生産販売を行うに至る主体性が認められる。そして当該期は、伊藤氏の「南伊勢系土師器」の成立・展開期であり、「有爾郷」はその中心地として土師器を作り続けたと考えられている。

古代以来、土師器の一大生産地として発展を続けた「有爾郷」は、影響力の大きさは時代とともに変化してきたとはいえ、その背景には伊勢神宮が常に存在してきた。伊勢神宮への土器の調進数も時代を経るごとに増加の一途をたどり、延宝6(1678)年には41,926口が調進されたとあり、昭和3(1928)年には121,861口にのぼる。伊勢神宮では神事で使用した上器は再使用することなく土中に埋め、土に還す習わしとなっていることが、このような大量の土器を必要とした背景となっている。現在、伊勢神宮の神事で使用する土器も、やはり「有爾郷」義村の神官御料土器調製所にて調製されている。同所の所在地は、7世紀半ば頃に伊勢神宮の庶務一般を官掌する官司である神序が置かれていたと推定される地

でもあり、鳥居遺跡(7)として遺跡指定されている。調進土器は、明治の一時期において、現伊勢市岡本町字向山にて調製された時期もあったが、原料の粘土は依然義村から供給されていた。その後程なくして再び義村の地に復し、今日に及んでいる。

このように、「有爾郷」は伊勢神宮と共に歴史を歩んできた地域であると言えよう。そして密接な関係を保ちながら、今なお御料土器を作り続けている。

[註]

- ①『和志縣發表』京都大学文学部図書室書評 1968年
- ②『都志縣史』解 神都部
- ③平松仁三『御器文』白川山房・伊勢國、西山文・吉良忠・久松俊生・多恵郎
- ④『日本歷代史考古系第2卷 三重県の祭祀』平丸井 1893年
合著者:「第一」有爾郷の土師器と神官入「玉祖町史」1巻 三重県郷土資料刊行会 1893年
下巻町「玉祖町史」
- ⑤金子久夫「第二」有爾郷の土師器と神役人、「玉祖町史」1巻 三重県郷土資料刊行会 1893年
三編町「玉祖町史」
- ⑥鶴岡22
- ⑦小林和也「東海地方における古代の土器窯と改造」(予稿)
- ⑧「有爾郷の上器と其の生産者」実業研究会編 鹿島社 1966年
- ⑨竹田義典「有爾郷御料土器と有爾郷」『研究紀要』第5号
三重県埋蔵文化財センター 1996年
- ⑩小林義「中世後期における上器山八田田の一部-那須田有爾郷を基材として-」
『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992年
- ⑪鶴岡23
- ⑫小林義「伊勢山元・度島郡基盤型調査事業地須崎文化財発掘調査報告 第一報告-」
『宗教教育委員会・三重県埋蔵文化財センター』1991年
伊藤信惟「伊勢神宮土器の調査」中世土器工具
- ⑬『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992年
- ⑭『伊勢山元・宇治御伊勢石の七石器に関する一試論』『The history』vol. 1
三重県文化芸術研究会 1990年
- ⑮鈴木忠木「神宮の御料土器」『備註』45号 神宮司編『神宮御製』1928年



第2図 土師器生産関連遺跡位置図 (1:100,000)【国土地理院「松阪」「伊勢」1:50,000から】

※スクリーンショット部分は旧「有爾郷」推定範囲

1 外山遺跡	2 片落C遺跡	3 水池上器製作遺跡	4 北野遺跡	5 戸塙遺跡	6 斎宮跡
7 鳥居遺跡	8 カリコ遺跡	9 世古置跡	10 発見A遺跡	11 発見B遺跡	12 犀屋(発シC)遺跡
13 畑田置跡	14 長五郎林B遺跡	15 大道A遺跡	16 世古D遺跡	17 川原口遺跡	18 金剛坂遺跡
19 要知外遺跡	20・21 斎宮筋内土師器施成坑検出位置	22 曽祢遺跡	23 黒土遺跡	〔1・7以外は土師器施成坑検出遺跡〕	

III. 外山遺跡

本遺跡は、平成元年度の県農業基盤整備事業に伴い一部調査が行われ、平安時代後期～近世にかけての上坑・溝・掘立柱建物などが確認されている。

調査区の現況は、整備事業の際に敷設された農道で、道路側溝の保全のため調査区幅は3m弱、総延長約200mの範囲で調査を行った。今回の調査区は全体的に遺構密度は低く、出土遺物も僅少であった。また、「線」的な調査区ということもあり、検出した遺構の全体像が把握できないものが多く、遺構内出土の遺物が僅少のため、遺構の時期も判然とし

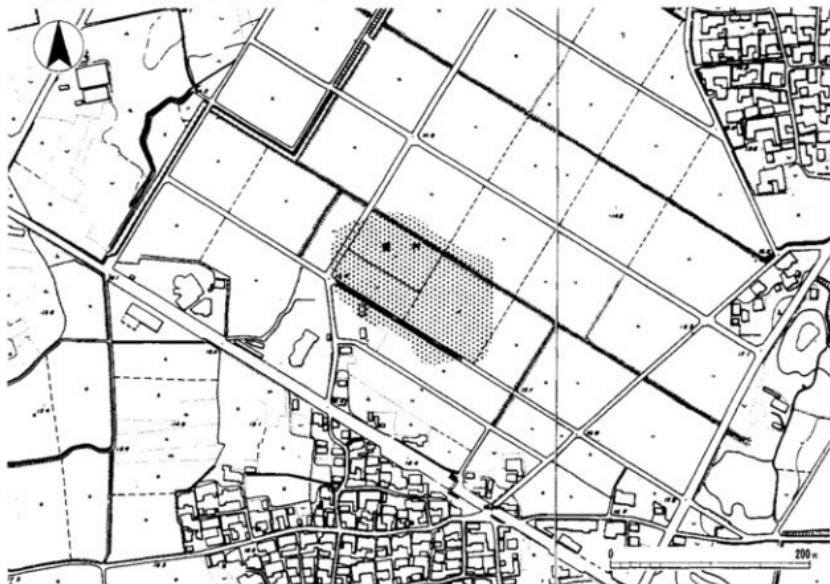
ないものが多い。

基本層序は、調査区の中央部と両端部で異なる。調査区中央部約50mの区間では、農道敷設時の盛土による整地層の直下が地山となる。一方、調査区両端部では、概ね整地層下に黒色粘質土層を一層介在し、その直下で地山となる。従って、全体的に土層はほぼ単層と考えられる。整備事業前の現況が田、或いは畑であったことから、黒色粘質土層は旧耕作土であると思われる。

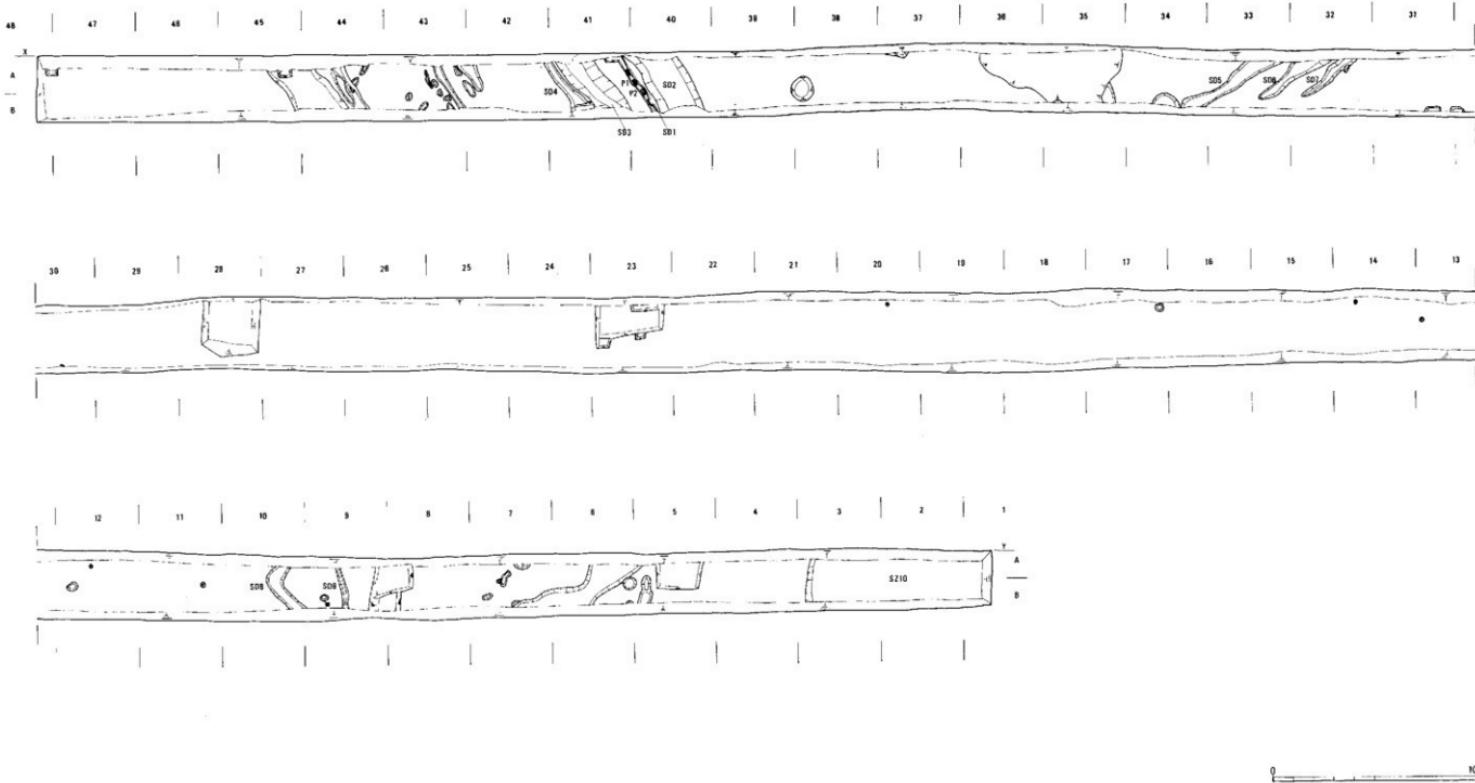
I. 遺構

SD 1 SD 2に並走する形でほぼ南北方向に延びる。検出の範囲内での形態的特徴として、溝の側面に段を持つことが挙げられるが、SD 2に切られてしまっているため、もう一方の側面と対称するのかは不明。また、その段上に4基のピットがあり、ピット1で

は集石が確認できた。集石下からは、山茶碗(4)の高台部が半分に割れた形で出土している。また、ピット2では、16世紀頃の土師器鍋(2)が出土した。埋土はにぶい黄褐色土の一層で、出土遺物から室町時代の溝と考えられる。



第3図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第4図 遺構平面図 (1 : 200)

S D 2 両端が調査区外に延びているため、全体の規模は不明。検出部分では、最大幅 2.1 m、最深部 0.34 m である。埋土は褐色土で、ほぼ南北方向に延長し、S D 1 の東部分を切っている。土師器皿や、陶器片などが出土した。出土遺物や S D 1 との切り合い関係から、室町時代以降の溝とみられる。

S D 3 両端が調査区外に延長するため全体の規模は不明であるが、ほぼ南北方向に延びる溝とみられる。検出範囲では、幅 1.5 m、最大深度 0.47 m の規模を持つ。埋土は褐色土一層で、山茶碗や土師器の鍋等の小片が出土した。時期を特定する決め手に欠くが、室町時代以降と考えたい。

S D 4 両端が調査区外に延びるため、全容は不明。断面形は、ほぼ U 字形を呈し、埋土は淡黄色粘質土及びその下層の暗褐色粘質土の 2 層に分かれ。淡黄色粘質土には遺物は含まれず、暗褐色粘質土から土師器や陶器の小片が出土したが、いずれも出土量は僅少で、時期判断できる材料に乏しい。検出部分の規模は、幅 0.4 ~ 0.7 m、最大深度 0.21 m である。S D 3 に並走し、ほぼ南北方向に延びている。

S D 5・6・7 これら 3 条の溝は、ほぼ東西方向に並走するように位置する。埋土はいずれも褐色土で、熔炉等の土師器片が各溝から出土した。S D 5 からは土管のような筒状の土器が出土したが、全体の器形や用途等は不明。埋土や出土遺物、相互の位置関係から、3 条とも近世の同一期の溝と考えられる。いずれも調査区外に延びているため全体像は不

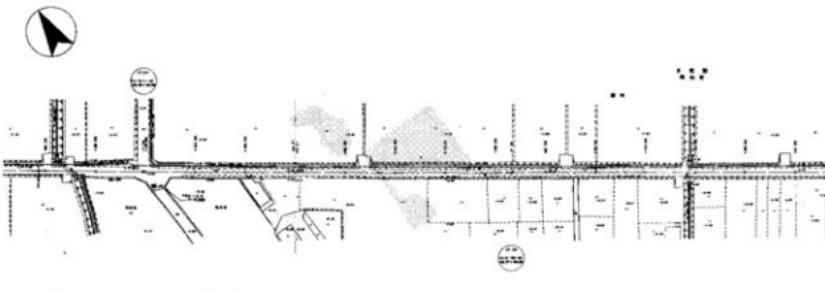
明。検出の範囲内での規模としては、S D 5 は、幅 0.4 ~ 0.8 m、深さ 0.09 m 程度、S D 6 は、最大幅 0.8 m、深さ 0.16 m 程度、S D 7 は、最大幅 0.5 m、深さ 0.12 m 程度である。

S D 8・S D 9 ともに埋土が褐色土で、S D 8 は、幅約 0.6 ~ 0.9 m、深さ 0.07 m で、平面「く」の字状に屈曲する。一方、S D 9 は、幅約 0.3 m、深さ 0.05 m、断面 U 字形を呈する。出土遺物はいずれも土師器の小片が僅かに出土したのみで、時期を特定するだけの材料は得られなかったが、中世以降のものと思われる。おそらく、後世の削平により、遺構の上部が削平され、底部のみが残存したものと推測される。両者は、埋土の状態などから同時期の溝と思われるが、相互の関係については不明である。

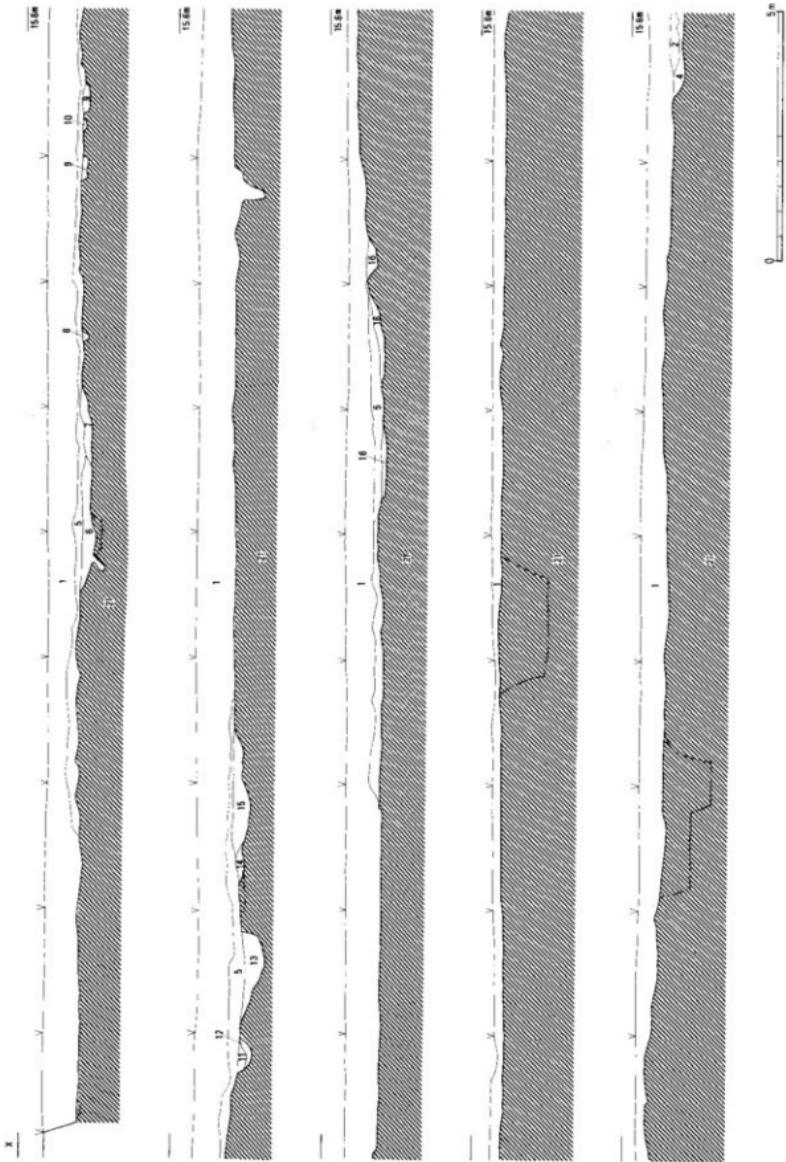
S Z 10 調査区の南東端に位置する落ち込みである。農道敷設以前の現況は田であったとみられ、1 m 程の厚い旧耕作土直下で黄灰色粘土の地山に達する。地山の黄灰色粘土は、船のように非常に粘性が強い。この粘土と同一のものとみられるものが、平成元年度調査の際に二基の土坑内で確認されている。小林氏は、この粘土を土器製作のための所謂「埴土」とし、前述の二基の土坑は、「埴土」を備蓄するための設備であると推定している。

(註)

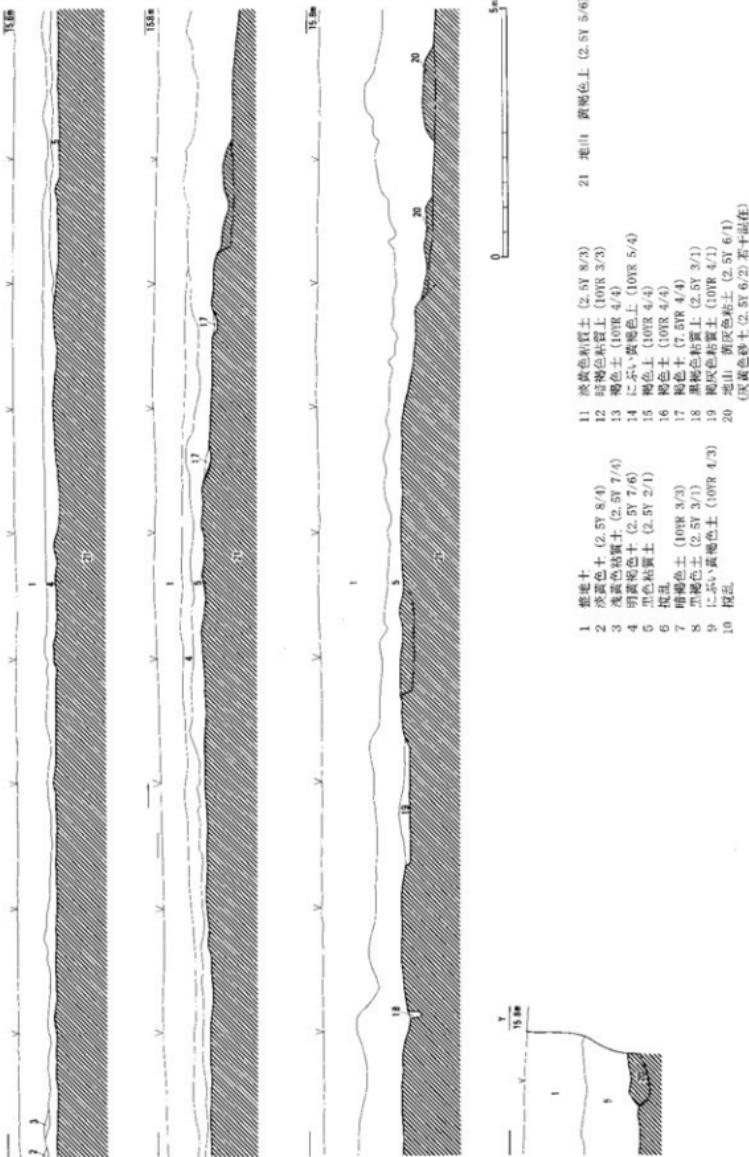
- ① 小林秀「外山遺跡」
『平成元年度農業整備事業地盤調査報告書』第 1 分冊
三重県農業文化財センター 1990 年
② 施用田



第 5 図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第6-1図 土層断面図 (1:100)



第6-2図 土層断面図 (1:100)

2. 遺物

今回の調査では、整理箱 15 箱分の遺物が出土したが、大半は黒色粘質土（旧表土）中から出土したもので、遺構内出土のものは極めて少量であった。また、大半が小片のため、図化できたものも少數であったため、器種別の報告としたい。

土師器 (1) は、甕である。頸部へ口縁部のみの残存のため、体部の調整方法は不明であるが、指押さえ及びナデによる簡単な調整のみで、ハケによる調整の痕跡は認められない。口縁端部がつまみ上げられることはなく、折り返しもなされていない。平安時代の後半期に属するものであろうか。(2) は鍋である。伊藤裕偉氏の編年の第4段階 C 型式に相当するもので、金属製煮沸用具の模倣形である。体部には若干のハケ調整が認められる。内面には黒斑が認められる。残存部分においては、外面に煤は付着していない。16世紀頃の遺物である。

山茶碗 すべて底部のみの残存である。これらは、いざれも渥美産のものと思われ、藤澤編年の渥美型第2型式（尾張型第5型式並行）に相当すると考えられる。12世紀末～13世紀初頭に属するものである。(3) は、断面三角形状の高台が僅かにハの字状に開く。また、高台の貼り付け方が雑で、接着部が

目立つ。内面には自然釉が残る。(4) は、内面に重ね焼きの痕跡が明瞭に残り、自然釉が若干付着している。外面には糸切り痕が僅かに認められる。(6) は、外面に明瞭な糸切り痕跡が残る。内面は使用による磨耗のためか、非常に滑らかな器肌を呈する。

土錘 (7)～(13) は、平面形態が長方形或いは中央をやや膨らませた長細いタイプのものである。一方、(14)～(16) は、全長と全幅にあまり差のない太短いタイプのものである。土錘は、当遺跡所在の蓑田周辺で第二次世界大戦前後まで盛んに作られ、伊勢市の大湊等に出荷していたよう²で、付近の畠地等で容易に表採できる。いずれも焼成状態が良いため、近世～近代のものかもしれない。

石印 (17) は、上端～表面に梅の枝が彫り込まれ、緻密な装飾がなされている。篆書体で「絳粹」と刻まれた篆刻である。石材は、珪質粘板岩（俗称那智黒石）である。近世以降のものであろう。

【註】

① 伊勢守俊「中世伊勢系の土器群に関する一試論」*The history* vol. I

三重県文化研究所 1990 年

② 藤澤裕偉「山茶碗研究の現状と課題」*研究会要旨* 第 9 号 三重県埋蔵文化財センター 1994 年

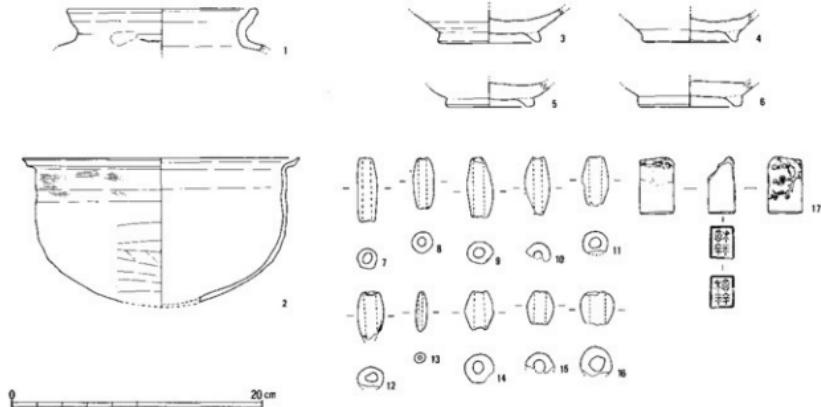
③ 小林秀「外山遺跡」「手ぬぐい復元調査実施報告事務地盤埋蔵文化財発掘調査報告－第 1 分冊－」

三重県埋蔵文化財センター 1999 年

地盤の古墳から、同様の瓦片を得た。

④ 愛知県大学 矢島清志教授にご教示いただいた。

⑤ 日須高等学校 碑部克義君にご教示いただいた。



第 7 図 出土遺物実測図 (1 : 4)

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
1	002-01	土師器壺	—	2B 旧表土	15.0	—	—	内面：口縁部ヨコナデ 脚部ヨコナデ 外面：口縁部ヨコナデ 脚部ヨコナデ	やや粗 5mm以下 の砂粒含	並	浅黄橙 10YR 8/3	口縁部 1/4	頭部に粘土粙接合 痕跡有り
2	001-01	土師器鍋	SD1	40AB SD21	24.0	—	—	内面：口縁部ヨコナデ 体部ナデ 外面：口縁部ヨコナデ 脚部ハケメ(目地)	密 2mm以下 の砂粒含	良	橙 7.5YR 7/6	口縁部 1/8	内面に黒斑有り
3	001-02	山茶碗	SD3	40AB SD20	—	—	高台径 8.0	内面：ヨコナデ 外面：高台貼り付け後 ヨコナデ	密 2mm以下 の砂粒含	良	灰白 10YR 7/1	底部 1/2	内面に自然着付着
4	001-03	山茶碗	SD1	41AB SD21	—	—	高台径 7.4	内面：ロクロナデ 外面：底部凹部系切り 高台貼り付け後 ヨコナデ	やや粗 5mm以下 の砂粒含	並	灰黄褐 10YR 6/2	底部 ほぼ 完存	・内面に重ね焼きの痕跡有り ・内面に自然難 若干付着
5	002-03	山茶碗	—	表探	—	—	高台径 7.0	内面：ナデ 外面：高台貼り付け後 ヨコナデ	密	良	明褐灰 7.5YR 7/2	底部 1/4	
6	002-02	山茶碗	—	擾乱坑	—	—	高台径 8.0	内面：ナデ 外面：底部凹部系切り 高台貼り付け後 ヨコナデ	密	良	淡黄 2.5Y 8/3	底部 1/2	
7	003-04	土錐	—	5B 旧表土	最大径 1.6	全長 5.2	重量 10.44g	—	密 1mm以下 の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR 7/4	ほぼ 完存	
8	003-03	土錐	—	5B 旧表土	最大径 1.6	全長 4.1	重量 7.76g	—	やや粗 2mm以下 の砂粒含	並	にぶい橙 7.5YR 7/4	ほぼ 完存	
9	003-05	土錐	—	7A 旧表土	最大径 2.0	全長 4.8	残存重 11.80g	—	密	良	淡橙 2.5Y 8/4	端部 若干 欠損	
10	004-06	土錐	—	排土	最大径 不明	残存長 4.7	残存重 9.66g	—	やや粗 2mm以下 の砂粒含	良	橙 5YR 6/6	約 1/2	
11	004-01	土錐	—	12B 旧表土	最大径 1.9 (推定)	全長 3.9	残存重 11.29g	—	密 1mm以下 の砂粒含	良	橙 2.5YR 6/8	端部 欠損	
12	004-05	土錐	—	表探	最大径 2.1	残存長 3.8	残存重 8.58g	—	密 1mm以下 の砂粒含	並	灰白 2.5YR 8/2	約 1/2	
13	002-06	土錐	—	6A 旧表土	最大径 0.9	残存長 3.1	残存重 1.45g	—	密 1mm以下 の砂粒含	並	にぶい黄褐 10YR 5/3～ 灰白 10YR 8/2	端部 若干 欠損	
14	002-05	土錐	—	擾乱坑	最大径 2.3	全長 3.1	残存重 11.58g	—	密 1mm以下 の砂粒含	良	にぶい橙 7.5YR 7/4	一部 欠損	
15	004-07	土錐	—	排土	最大径 2.2	全長 2.7	残存重 4.73g	—	やや粗 2mm以下 の砂粒含	良	淡黄 2.5Y 8/4	約 1/2	
16	003-06	土錐	—	6B 旧表土	最大径 2.5	残存長 2.7	残存重 11.06g	—	やや粗 1mm以下 の砂粒含	良	橙 5YR 7/6	一部 欠損剥離	
17	004-08	石印	—	33A 旧表土	全高 4.5	全幅 2.7	奥行 2.1	—	—	—	暗灰 N 3/0	ほぼ 完存	篆刻「稔輝」と刻字

第4表 出土遺物観察表

3. 結語

今回の調査において検出できた遺構は、殆どが溝で、「有衛郷」の土器生産に関連するものや、集落跡等、何ら検出することができなかった。また、平成元年度の調査結果に関連するものも、残念ながら確認することはできなかった。ただし、調査区南東端の落ち込みで確認した黄灰色粘土が、小林氏のいいう「埴土」であるならば、「有衛郷」における土器生産の一側面が窺えるといえよう。外山遺跡の北西に位置する北野遺跡においても、飛鳥～奈良時代の堅穴住居の埋土中に、白色粘土が含まれているものがあり、住居の廃絶後、土器製作に用いた粘土を廃棄していた可能性が指摘されている。また、土器製作に欠かせない原料の粘土が、北野遺跡の東に広がる水田の床土の下に多く存在していると言われており、外山遺跡は、まさにその東の田畑上に立地している。この付近は、神代の昔、高天原から埴土を移したという伝承地でもあり、『倭姫命世紀』に「天神之剣。土師之物忌乎 定置。取宇仁之波運。造天平鉈。八十枚天。」とあるように、古代より「埴土」の採取が行われていたことが知られる。今回の調査では、土器の生産活動に直接関連する資料は得られなかったものの、原料である「埴土」が豊富に存在するという、一大生産地としての必要条件が満たされた地域であることが再確認できた。

溝については、室町時代及びそれ以降のものと判断したSD1～SD4は、ほぼ南北方向に向きをそろえて築かれている。一方、近世の同一期のものとみられるSD5～SD7は、その向きをほぼ東西に向いていることから、それぞれある程度、方角を意識して築かれたものとみられる。しかし、これらの溝に関連する遺構は認められず、性格等は不明である。

調査区周辺は、整備事業以前もほぼ平坦地であったが、遺構の項でも述べたように、調査区の中央付近は、農道敷設時の整地土の直下が地山となり、これを頂点に、両端部に向かって地山のラインが徐々に下がっていることが確認できた。この事実から、「外山」という小字名の示す微高地が、ここにかつて存在し、後世の削平によって、現況のような平坦地となったものと考えられる。SD5～9は非常に

浅いことから、上部が削平された可能性もあり、前述のことが関係するのかもしれない。

(註)

- ① 小林系「外山遺跡」、『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』
千葉県埋蔵文化財センター 1996年
- ② 竹田義治 他「北野遺跡（第5次）発掘調査概要」
第1回調査研究会『古代の土器製造遺跡について』
北野遺跡の遺跡と遺物 古河・楢崎分 資料 1995年
- ③ 『源野君傳記』第3章 第一節 上 神祇篇
- ④ 前掲註①で小林氏も同様の指摘をされている。

IV. 片落 C 遺跡

玉城丘陵の北端にあたる丘陵西側緩斜面上に位置する古墳へ鎌倉時代の遺跡である。遺跡の現況は山林で、所在地の明和町の遺跡地図では、今回の調査区北側の丘陵緩斜面上を中心に遺跡が広がるものと推定している。事前の範囲確認調査で、その南限が事業予定地内まで広がるか否かを確認したところ、土師器焼成坑3基、土坑1基を検出したため、南側の用水路の敷設位置まで遺跡の範囲が広がることが判明した。

調査区の基本層序は、用水路堤防の築造の際に盛土された整地層下に黒色粘質土を介在し、その直下

で地山に達する。範囲確認調査の際にも同様の土層を観察しており、地山直上の黒色～黒褐色粘質土層は、用水路敷設以前の旧表土と考えられる。

調査面積は約100 m²で、検出した遺構は土坑10基、旧流水路2条、ピット2基であった。トレチの設定地点は、工法変更等により事業地外となつたため、範囲確認調査の際に検出した3基の土師器焼成坑及び1基の土坑は現状保存され、今回調査対象とはならなかつた。出土遺物は僅少で、整理箱6箱分（うち範囲確認調査時1箱）の出土をみたのみで、遺構内出土の遺物もごく少量であった。

1. 遺構

SK1 調査区外に延びるため平面形態は不明であるが、おそらく円形の土坑と思われる。深さは0.16m程度で、土師器小片が出土している。ハケ調整を施した甕の体部片、頸部片と推定できるが、時期を

決定できる材料とはならないため、遺構の時期は不明である。

SK2 SK1に切られているため平面形態は不明であるが、ほぼ円形の土坑と考えられる。深さ0.07



第8図 遺跡地形図 (1:5,000)

m程度の浅いもので、土師器の甕などの小片が出土している。飛鳥～奈良時代の土坑と思われる。

S K 3 調査区外に延長するため全体の規模は不明ながら、不整橢円形を呈した土坑と見られる。深さ0.12 m程度で、土師器小片が数片出土したが、時期を知る材料に欠けるため、遺構の時期は不明。

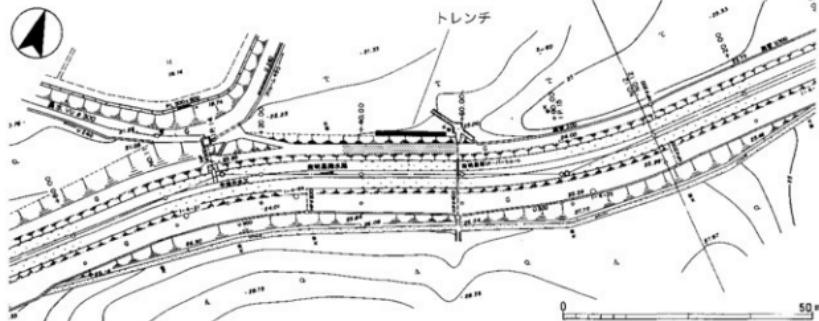
S K 4 不整橢円形を呈した土坑で、SR 7に一部を切られているが、長軸1.7 m、深さ0.32 m程度の規模を持つ。褐灰色粘質土の埋土中からは、土師器・甕の小片や、須恵器・杯身の底部小片などが出士している。出土遺物から、飛鳥～奈良時代の土坑と思われる。

S K 5 SR 7に大部分を切られているため、全体の形態・規模など不明。不整橢円形の土坑となるか。土師器の細片のみの出土のため、時期は不明。

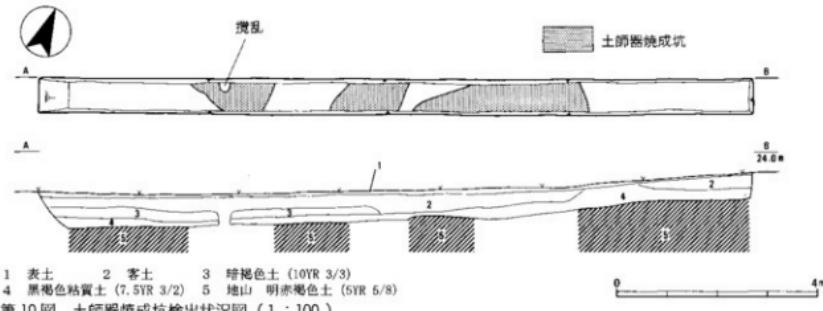
S R 6 調査区の中央を縱断する溝状遺構である。旧地形の谷筋にあたる部分に位置することや、遺構

の形態から旧流水路と考えられる。SR 7と大部分で重複し、調査区半ばからSR 7に吸収されるよう消滅している。土師器・甕の口縁部、体部小片や瓶のものと思われる把手部分、須恵器の小片などが出土した。検出部分はほんの一部に過ぎず、出土遺物も上流からの流れ込みの可能性もあるが、得られた資料の範囲内で推定すると、少なくとも平安時代には、この流水路は埋没していたと思われる。

S R 7 SR 6と同様の理由から、旧流水路と判断した。西側の下流部では特に不規則な平面形態をなし、検出した範囲内での規模は、最大幅1.5 m、最深部0.3 mである。土師器・甕の口縁部、頸部、体部の各小片や瓶のものと思われる把手部分、須恵器の小片、中世～近世陶器片が出土している。SR 6の埋没後、程なくして再び流水路として成立し、少なくとも近世頃まではこの地に水流を形成していたものと考えられる。

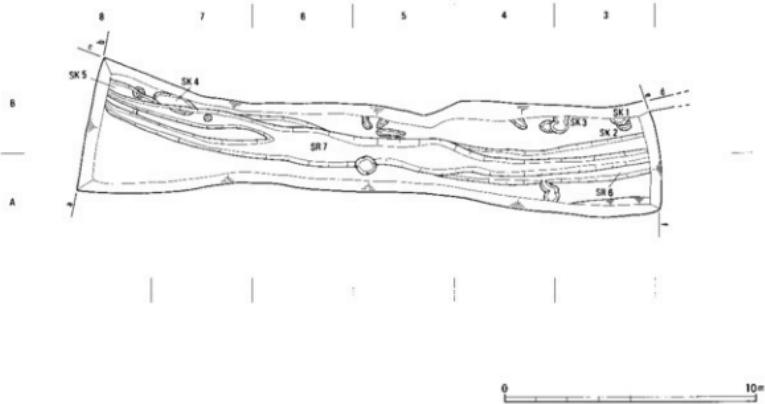


第9図 調査区位置図 (1 : 1,000)

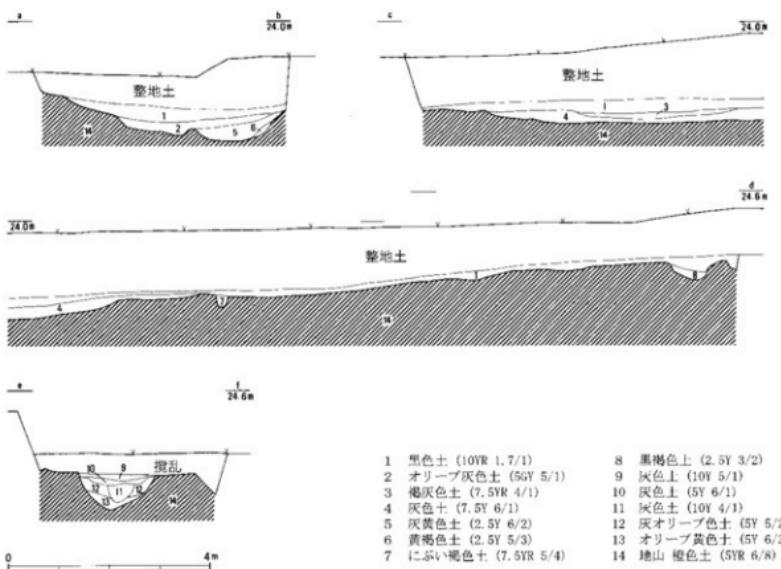


1 表土 2 客土 3 暗褐色土 (10YR 3/3)
4 黒褐色粘質土 (7.5YR 3/2) 5 地山 明赤褐色土 (5YR 5/8)

第10図 土師器焼成坑検出状況図 (1 : 100)



第11図 遺構平面図 (1 : 200)



第12図 土層断面図 (1 : 100)

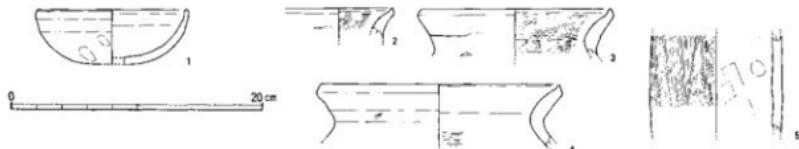
2. 遺物

今回の調査において出土した遺物の時期は、概ね飛鳥～奈良時代のものが中心で、一部中世～近世のものもみられる。出土量は整理箱6箱分で、この内同化できたものは僅かであった。

以下、掲載遺物の概略を述べるが、詳細は下記の観察表を参照されたい。

(1) は土師器の粗製碗である。口縁部の約1/3程度までヨコナデがなされるが、以下底部にかけては指押さえ及びナデの調整となる。口縁部は緩やかに立ち上がり、端部がやや内弯する。(2)～(4)

は土師器の甕である。いずれも口縁端部がつまみ上げられ、外面に面を持つ。(2)は、残存部分僅少で、詳細は不明であるが、内面にハケメが確認できる。(3)は、口縁端部がやや内傾気味につまみ上げられる。(4)は、器壁の剥離、磨耗が激しく、調整は判然としないが、頸部内面に僅かにハケメが認められる。(5)は、体部のみの残存で、器形から長胴甕とも思われるが、頸部径が9cmしかないことから、筒形土器と判断した。内面には、指押さえと板ナデによる調整が認められる。



第13図 出土遺物実測図 (1:4)

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
1 -03	001 -03	土師器 粗製碗	-	堆土	12.0	4.4	-	内面：口縁部ヨコナデ 体部ナデ 外側：口縁部ヨコナデ 体部指捺オサエ・ナデ	やや粗 2mm以下 の砂粒含	並	淡黄 2.5Y 8/4	約 1/8	
2 -01	001 -01	土師器 甕	SK2	3B SK2	-	-	-	内面：口縁部ヨコナデ 体部ナデ後ハケメ (1本/cm) 外側：口縁部ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部 小片	
3 -02	001 -02	土師器 甕	-	5B 旧表土	15.0 (推定)	-	-	内面：口縁部ヨコナデ 体部ナデ後ハケメ (10本/cm) 外側：口縁部ヨコナデ 頭部ハケメ	密 1mm以下 の砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部 1/8	
4 -05	001 -05	土師器 甕	-	試施	19.0	-	-	内面：口縁部ヨコナデ 頭部ハケメ? 外側：口縁部～頂部ヨコナデ 頭部剥離後、調整法不明	やや粗 2mm以下 の砂粒含	やや不良	明黄褐 10YR 7/6	口縁部 1/4	
5 -04	001 -04	土師器 筒形土器	-	7B 検出面上	胴部 内径 9.0	-	-	内面：指捺オサエ・板ナデ 外側：ハケメ (11本/cm)	やや粗 1mm以下 の砂粒含	並	浅黄橙 10YR 8/4	胴部片	

第5表 出土遺物観察表

3. 結語

本調査の調査区内では、数基の土坑と自然流路の検出をみたのみであった。また、出土遺物も僅少のため、遺構の時期やその性格等不明な部分が多いと言わざるを得ない。従って、範囲確認調査時に検出し、その後現状保存された土師器焼成坑を中心若干述べることで、本報告の結語としたい。

平成 11 年 3 月末現在、三重県内で確認されている土師器焼成坑は、29 遺跡・460 基を数える。この内、片落 C 遺跡の位置する明和町南部から隣接の玉城町にかけての所謂「有爾郷」では、20 遺跡・429 基にのぼる土師器焼成坑が確認されている。さらに、本遺跡と同一丘陵上には、6 基を確認した発シア遺跡、16 基を確認した発シ B 遺跡、6 基を確認した垣場遺跡、100 基を確認した戸峯遺跡群、2 基を確認した長五郎林 B 遺跡等があり、今後の調査でさらに多数の土師器焼成坑が検出される可能性が非常に高いと言えよう。

本遺跡検出の土師器焼成坑は、現状保存が図られ、遺構掘削に至らなかったため、詳細については不明な点が多いが、範囲確認調査時に得られた記録から、推定も含めて次のことが言える。立地場所は丘陵緩斜面上で、地山を掘り込んだ平面形態は中央の一基を除くと二等辺三角形若しくは台形と推定できる。また、東側のものは、頂点部分が等高線に対して低い方を向き、輪郭部分が被熱により橙色を呈している。以上のことは、三重県内の他の土師器焼成坑の基本的特徴と一致し、事例の蓄積となる資料が得られた。遺構未掘削のため、遺構内出土の遺物は得られなかつたが、検出面直上の黒褐色粘質土層(旧表土)中から土師器片が多数出土しており、参考資料となると思われる。器種はすべて甕、若しくは長胴甕のため、所属期は明確ではないが、口縁部が肥厚し、端部が上方につまみ上げられる傾向が強く、端部外面に面を持つ特徴から、7 世紀代の遺物の可能性があると思われる。

本調査区では、東西方向に調査区を縱断する形で流水路を検出したが、その北側で土師器焼成坑と同様の時期の土坑も検出している。流路の南側は既に削平・擾乱を受けているためその様相は不明である

が、本調査区は、流路を区切りとする、片落 C 遺跡の縁辺部である可能性も考えられる。そう仮定すると、範囲確認調査時に検出した土師器焼成坑は、本遺跡の中で最も高位に位置するもので、北側の丘陵裾部にかけて、さらに数基の土師器焼成坑が存在する可能性が高く、同時期を中心とした集落跡の存在も想定される。

〔註〕

- ① 竹田進治「E. 基内における土師器焼成坑の調査」『研究記要』第 7 号
三重県埋蔵文化財センター 1995 年
- ② 「三重県埋蔵文化財センター年報 10」三重県埋蔵文化財センター 1999 年
- ③ 上村安生「四、三重県内の土師器焼成坑について」『研究記要』第 7 号
「三重県埋蔵文化財センター 1998 年」
- ④ 上村安生「北野遺跡出土遺物観察について」第 1 回実験研究会
『古代の土師器焼成遺跡について』北野遺跡の遺構と遺物見学・検討会資料 1995 年

V. 付 編

1. 長五郎林B遺跡

平成9年度事業の1号幹線水路明和工区その1工事に伴い、明和町有爾中に所在する長五郎林遺跡の

工事立会いを実施し、その際、範囲を確認したところ、飛鳥～奈良時代を中心とした遺構が認められた



第14図 遺跡位置図 (1 : 50,000)【国土地理院「松阪」「明野」「国東山」「伊勢」(1 : 25,000から)】



第15図 遺跡地形図 (1 : 5,000)

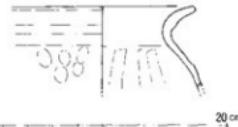
ため、第15図に示した範囲に遺跡が広がることが判明した。所在地の明和町教育委員会との協議の結果、周知の遺跡範囲を「長五郎林A遺跡」とし、今回確認された範囲は「長五郎林B遺跡」とした。

本遺跡は、玉城丘陵の北端にあたる標高24～25m程度の丘陵上に立地する。遺構面は黄色土の地盤で、表土直下若しくは暗茶色土の遺物包含層を介在し、地表下10～60cm程度で検出面に達する。検出した遺構は、土師器焼成坑、土坑、溝（或いは流路かり）、ピットなどで、比較的遺構密度が高く、古式土師器・土師器・須恵器の出土をみた。土師器焼成坑はA・Cトレンチで検出され、Aトレンチでは、輪郭部分が被熱により橙色に変色しており、平面形が隅丸二等辺三角形を呈していることも確認できた。また、Hトレンチで検出した土坑の埋土中には焼土が混在しており、この土坑も土師器焼成坑の可能性がある。Lトレンチでは、ほぼ等間隔に並ぶ4基のピットを検出しており、掘立柱建物が存在する可能性が高い。この他、十数基の土坑も検出されたが、本遺跡は現状保存され、遺構の掘削には至っていないため、各遺構の時期や性格等、詳細は不明である。また、確認した遺跡範囲は、あくまでも事業地内における遺跡範囲であり、北側の丘陵緩斜面上に遺跡範囲が広がる可能性もある。

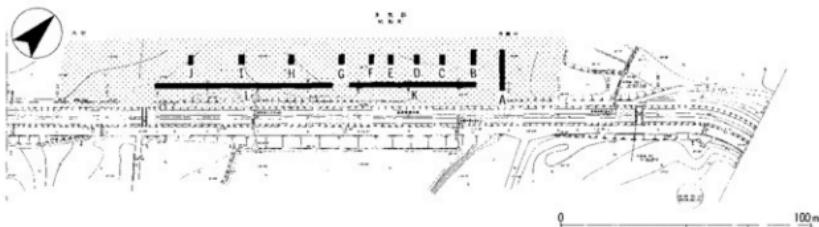
なお、前述のとおり、本遺跡は開発主体者である東海農政局との協議の結果、工法の変更により掘削範囲を現水路内に止め、工事用仮設道路及び資材置場の予定地は盛土することにより現状保存された。

トレンチ	検出遺構	出土遺物
A	土師器焼成坑・土坑	土師器
B	土坑	
C	土師器焼成坑	
D	土坑・ピット	土師器
E	土坑	土師器
F	土坑	土師器
G	土坑	土師器
H	土坑	古式土師器
I		
J		
K	土坑・溝（流路か）	土師器・須恵器
L	土坑・ピット（掘立柱建物柱穴）	土師器

第6表 検出遺構・出土遺物一覧表



第16図 Aトレンチ出土遺物実測図（1:4）



第17図 トレンチ配図（1:2,000）

2. 合戦田古墳群

1号幹線水路工事に伴い、工事用仮設道路の拡幅の必要性から、合戦田6号墳所在の丘陵法面が削除されるため、第19図に示した範囲で断面調査を行った。当該部分の分布調査の結果として、6号墳及び同古墳の北東約20mに位置する5号墳は、とともに墳丘南東部に周溝が認められ、墳丘の1/4が消滅しているとあり、これを踏まえ、主体部及び周溝延長の有無の確認を行った。調査の結果、土層観察からは主体部と思われる部分は認められず、破壊を免れ遺存しているとみられる。また、周溝については東側で幅1.5m、深さ0.5m程度の地山の崖みが認められたが、出土遺物ではなく、樹木の根攪乱の可能性も考えられるところから、墳丘南東部の周溝に延長するものか否かは判断し難い。開削された北側は、墳丘よりも低位の丘陵斜面であったことから、北側には周溝が延長していなかった可能性も考えられる。

一方、6号墳の南西約30mの地点では、土師器を多量に包含した、断面U字形の遺構を確認した。

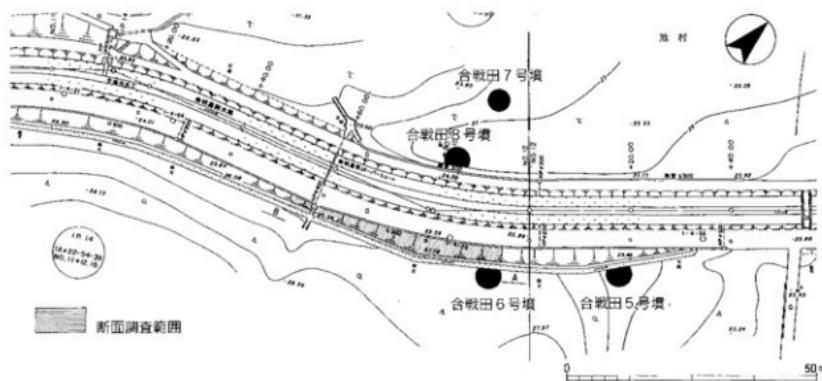
幅1.6m、深さ0.5m程の規模で、調査時に採取した土師器片はすべて焼である。図化できたものを第21図として掲載したが、その他の採取遺物も、器形や成形方法において同様の特徴を持つ。この遺構を古墳の周溝と想定し、丘陵上の地表観察及び断面調査を行ったが、想定を裏付ける結果は得られなかった。丘陵上は簡易水路の敷設等、地形の改変が著しく、現況の地表観察及び土層観察のみでは何とも言い難いが、出土遺物から7世紀代の遺構の可能性があり、未確認の古墳が存在する可能性は残しておきたい。或いはまた、北接する片落C遺跡と同様の時期の遺構であることから、合戦田古墳群所在の丘陵西側緩斜面上には、地理的条件から土師器生産に関連する遺跡の存在も想定される。

なお、今回の調査では、明確な結論を出せなかつたため、「合戦田古墳群」として報告した。

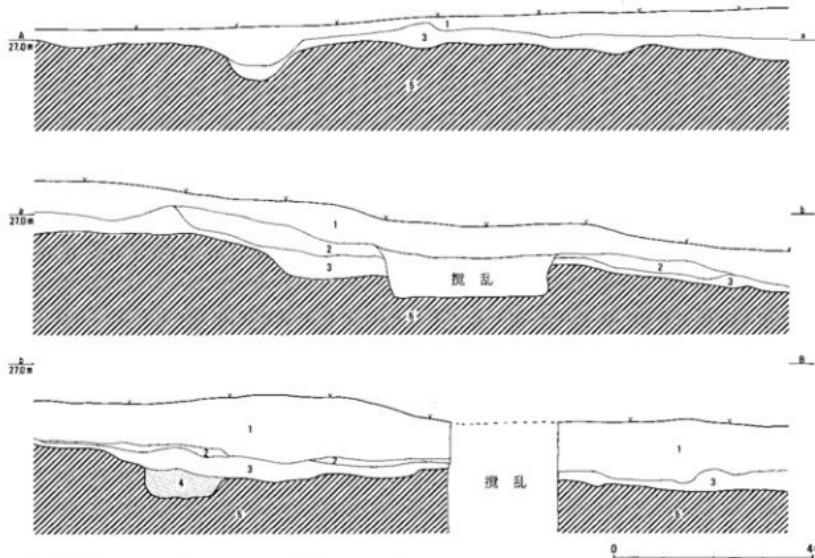
(註)
① 明和町『明和町地図』1988年



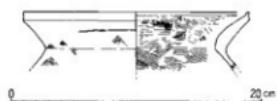
第18図 調査区周辺古墳分布図 (1:5,000) (大林古墳群は既に消滅)



第19図 調査区位置図 (1:1,000)



第20図 土層断面図 (1:100)

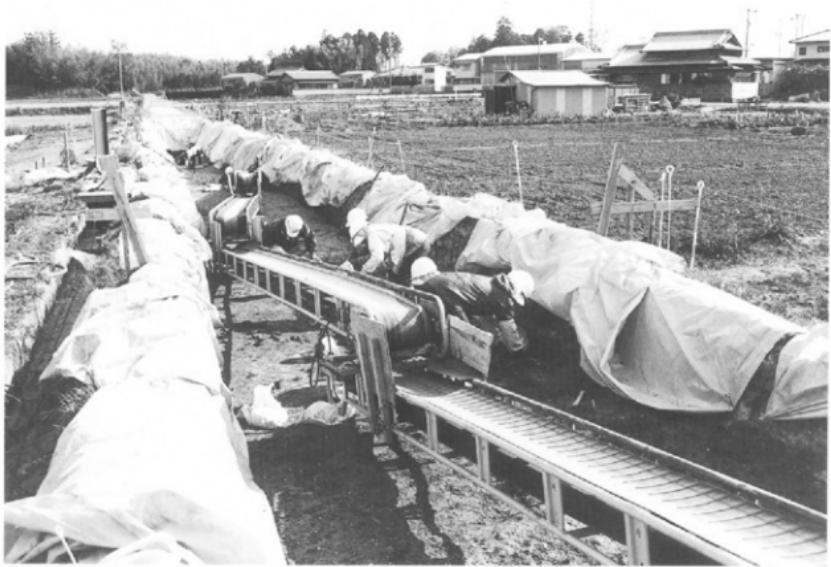


第21図 出土遺物実測図 (1:4)

図版 1



外山遺跡 調査前風景(北西から)



外山遺跡 作業風景



外山遺跡 北西調査区全景(北西から)



外山遺跡 SD3・SD4(北西から)

図版3



外山遺跡 SD 1・SD 2 (南東から)



外山遺跡 SD 5・SD 6・SD 7 (東から)

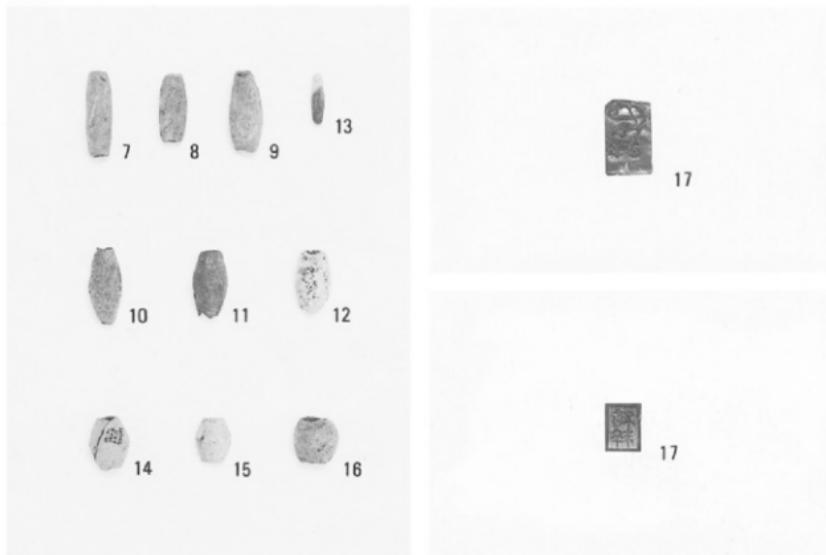


外山遺跡 SD 1 集石 (北西から)



外山遺跡 SD 1 遺物出土状況 (北東から)

図版5



外山遺跡 出土遺物(1:3)



片落C遺跡 土師器焼成坑検出状況(南から)



片落C遺跡 土師器焼成坑検出状況(東から)

図版7



片落C遺跡 調査区全景(東から)



合戦田古墳群 溝状遺構断面(北から)



報告書抄録

ふりがな	そとやまいせき・かたおちしいいせき							
書名	外山遺跡・片落C遺跡							
副書名	宮川用水二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ							
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	208-1							
編著者名	小山憲一・筒井正明							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Tel. 0596-52-1732							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°'〃	°'〃			
外山遺跡	三重県多気郡明和町養村字外山・矢畑・深田	24442	632	34°31'10"	136°37'50"	981106～990118	700	国営宮川用水二期工事地改良事業
片落C遺跡	三重県多気郡明和町池村字片落	24442	199	34°31'00"	136°37'00"	981124～981209	100	同上
長五郎林B遺跡	三重県多気郡明和町有爾中字長五郎林	24442		34°31'10"	136°37'10"	971105～971114	600	同上
合戦田古墳群	三重県多気郡明和町有爾中字合戦田	24442		34°31'00"	136°37'00"	981124～981209	20	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
外山遺跡	集落跡	平安時代～江戸時代	土坑溝	土師器 山茶碗 土鍤				
片落C遺跡	生産遺跡	古墳時代～鎌倉時代	土師器焼成坑 土坑 自然流水路	土師器		土師器焼成坑は調査区外のため未掘削		
長五郎林B遺跡	生産遺跡	飛鳥時代～奈良時代	土師器焼成坑 土坑 溝	古式土師器 土師器 須恵器		工事立会いにより発見現状保存され調査未実施		
合戦田古墳群	古墳	古墳時代	周溝？	土師器		断面調査のみ実施のため詳細は不明		

平成 12(2000) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 2 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 208-1

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告 I

外山遺跡・片落 C 遺跡

2000 年 3 月 発行

編集行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 有限会社 カイガウイン